

児童の親和動機及び達成動機と生活意識の 関係に関する一研究

村 田 義 幸

A Study of The Relationship between The Affiliation/ Achievement Motive and Life-Consciousness in Primary School Children

Yoshiyuki MURATA

1. 問 題

今日、児童の心身の発達の現状について多くの問題点が指摘されている。身体面についてみると、「食生活の改善と共に体格は伸長したものの、体力は必ずしも十分でない」(昭和41年版「体育白書」, 文部省体育局 1967) ことが指摘されているが、四半世紀後の今日においても依然として「体力・運動能力の低下が続く青少年」(平成二年度版「体力・運動能力調査報告書」, 文部省体育局 1991) が問題視されているのである。また、島井ら(1992a, 1992b) は、成人病の大きなリスクファクターであり、同時に心身両面の発達に大きく影響することが指摘されている肥満とビデオゲーム遊びの関係について児童を対象に、全国規模の調査を実施し、ビデオゲーム遊びに代表されるような生活習慣と肥満との間に密接な関係があることを示唆するデータを得ている。

遊ばず、学ばず、働かずのいわゆる「三ズの川」を通りこし、無気力、無責任、無関心、無感動、無作法の「五無主義」さらには「十無主義」等が小学生や中・高校生の間で顕著になっていることが指摘されて久しいが、今日でも依然としてこの傾向は持続していると考えられる。

平成2年版「青少年白書」(総務庁青少年対策本部, 1991) は、子どもの遊びと友人関係の現状について分析し次のように述べている。

『今日の子どもの遊びは全体として、①室内において、②少人数で、③活動量の少ない、④商品化されたものを相手にする、⑤受動的なものが多くなっている。これは、かつて子供の遊びの代表であった「鬼ごっこ」, 「なわとび」, 「かくれんぼ」などが、①戸外において、②多人数で、③活動量が多い、④自然を素材とした、⑤それぞれが積極的に取り組む遊びであったことと対照的である。

この原因については様々な要因が考えられるところであるが、遊び場所、そして遊び時間の制約が大きな影響を与えていると考えられる。都市化の急速な進展とともに、子どもが自由に使えるような身近な遊び場や空き地が不足してきている。また、多くの子どもが学校外において塾や習い事に通っている結果、友達と一緒に遊ぶ時間を作ることが困難となっていることがうかがえる。このため、勢い、子供は一人で遊ぶことのできるテレビ、

漫画、テレビゲームといった遊びに向かわざるを得ない状況にある。』

遊びは、乳幼児や学童にとっては生活そのものである。多くの楽しみと心の安らぎを与えてくれる。同時にまた、心身の発達にとって欠くことのできない多くの感覚刺激を準備してくれる。多くの友達と、身体を使って、楽しく遊ぶ体験は感覚統合訓練にも通じる。そして、遊びは精神保健上の効果やも心身の発達に及ぼす効果と並んで、毎日の生活における動機づけを高める効果も期待できると考えられる。

本研究では、小学生を対象に、主として、学校での教科学習や特別活動の時間を除いた平日の放課後や日曜・祭日にどの様に過ごしたいと考えているのかを調べるために、日常生活における活動、興味・関心、意見に関する質問紙を作成し、児童の親和動機及び達成動機との関係を検討した。

2. 調査対象と手続き

(1) 調査対象

調査対象は、長崎市内F小学校5年生男子76名、女子88名、計164名である。調査は、1985年の2学期に、正規の授業終了後、各学級毎に集団で実施した。

(2) 調査の内容

a. 生活意識に関する調査：日常生活に関する考え方のうち、特に、平日の放課後や休日等のいわゆる余暇活動に関して、興味や関心及び意見等25項目からなる質問紙を作成した(表1)。そして、各質問項目に対して「まったくそのとおりだと思う」、「どちらかといえば賛成である」、「賛成とも反対ともいえない」、「どちらかといえば反対である」、「絶対に反対である」の5段階で評定させた。

b. 親和動機及び達成動機の調査：下山(1981)の児童用達成・親和動機づけ尺度43項目を用いて達成動機及び親和動機の程度を調査した。

(3) 調査の手続き

正規の授業の終了後、各学級毎に集団で実施した。質問紙の説明及び答え方の教示は、小学校の教師を目指している大学4年生の女子4名が担当した。教示を与えた後、教示者は各質問項目を読み上げ、児童各自の回答の速度を揃えるようにした。調査は生活意識に関する25の質問項目を先に回答し、その後、児童用達成・親和動機づけ尺度43項目を回答した。調査に要した時間は約45分である。

3. 結果と考察

(1) 生活意識に関する調査結果

25の質問項目について、「まったくそのとおりである」の回答に5点、「どちらかといえば賛成」に4点、「賛成とも反対ともいえない」に3点、「どちらかといえば反対」に2点、「絶対に反対」に1点を与え得点化した。各質問項目毎の平均評定点と標準偏差は表1に示すとおりである。

平均評定点の高い質問項目は、「23. のりものに乗るときは順番を守るべきだ」(4.61)、「14. 暴走族のような、みんなのめいわくを考えない人たちはきらいだ」(4.54)、「3. 休日には家族と一緒にハイキングやスポーツを楽しみたい」(4.48)、「18. ひまさえあれば、ともだちと話し合ったり、遊んだりするのは好きだ」(4.45)、「15. 剣道、サッカー、バ

表1. 生活意識に関する調査に用いた質問項目と平均評定点 (X) 及び標準偏差 (δ)

質 問 項 目	X (δ) 男女差
1. 写生をしたり, 好きな絵をかくことはとても楽しい	3.77 (0.96)
2. 学校から帰ると, なにもしないでねっころがっているほうが疲れなくてよい	1.85 (1.07)
3. 休日には家族と一緒にハイキングやスポーツを楽しみたい	4.48 (0.87)
4. 読書が好きなので, 時間のゆるすかぎり, 本を読みたい	2.93 (1.18)
5. 宿題や勉強をしてからでないと, ともだちにさそわれても遊ばない	2.37 (1.25) F > M
6. 下級生や弱い子をいじめるのはおもしろい	1.40 (0.87)
7. ともだちと一緒にいるといじめられるので, ひとりで遊ぶほうがよい	1.71 (1.20)
8. 家のでつだいをすすんでやることにしている	3.34 (1.16)
9. 学校の成績をあげるためには, 学習じゆくについて一生懸命勉強しなければならない	2.51 (1.21)
10. 近所の公園や道路などがよごれているときには, すすんでそうじをする	2.63 (1.14) F > M
11. おとなから, してはいけないといわれることをするのはスリルがあつておもしろい。	1.84 (1.14)
12. ともだちと一緒に遊ぶよりも, テレビやマンガをみるほうが楽しい	2.17 (1.21)
13. 勉強することは小学生としてとうぜんのことである	3.90 (1.12) F < M
14. 暴走族のような, みんなのめいわくを考えない人はきらいだ	4.54 (1.12)
15. 剣道, サッカー, バレー, 水泳などスポーツクラブの活動が好きだ	4.25 (1.04)
16. 学校から帰ると, ベットのせわをしたり, 花だんに水をまいたりして すこすことが多い	2.17 (1.24)
17. たくさんの本が読めるように, 近所に図書館や児童文庫ができたらよいと思う	3.44 (1.15)
18. ひまさえあれば, ともだちと話し合ったり, 遊んだりするのが好きだ	4.45 (0.91)
19. プロレスごっこやテレビのアクションもののまねをするのは楽しい	2.66 (1.30) F < M
20. 理科や社会, 算数, 国語などに関係のある本を読むのはためになるのでよい	3.80 (1.10)
21. 外で遊ぶよりも, 家のなかでトランプやゲームをして遊びたい	2.34 (1.18)
22. ピアノをひいたり, 笛をふいたり, 歌をうたったりするのが好きだ	3.31 (1.43) F > M
23. のりものに乗るときは順番を守るべきだ	4.61 (0.76) F > M
24. おおきくなったら, 世のなかのためになるような人になりたい	3.59 (1.16)
25. ひまなときには静かなところをひとりで散歩したい	2.34 (1.25)

※1. F > M, または F < M の表示は, 統計的に有意な性差が確認された項目である。

レー, 水泳など, スポーツクラブの活動が好きだ」(4.25) 等である。逆に, 評定点が低く, 賛成度の低かった項目は「6. 下級生や弱い子をいじめるのはおもしろい」(1.40), 「7. ともだちと一緒にいるといじめられるので, ひとりで遊ぶほうがよい」(1.71), 「11. おとなから, してはいけないといわれることをするのはスリルがあつておもしろい」(1.84), 「2. 学校から帰ると, なにもしないでねっころがっているほうが疲れなくてよい」(1.85) 等である。村田 (1985) は同一の質問項目について因子分析をおこない, 「よい子志向因

子」,「消極的孤立志向因子」,「積極的孤立志向因子」及び「いたずら志向因子」4因子を抽出しているが,平均評定点の高い項目は「よい子志向」及び「消極的孤立志向の一傾向(集団的遊び志向)」に属するものである。他方,平均評定点の低い項目は「消極的孤立志向+傾向」及び「いたずら志向」に属する項目である。

平均評定点に統計的に有意な男女差の認められた項目は6項目であり,「5. 宿題や勉強をしてからでないと,ともだちにさそわれても遊ばない」,「10. 近所の公園や道路などがよごれているときには,すすんで掃除する」,「22. ピアノをひいたり,笛をふいたり,歌をうたったりするのが好きだ」,「23. のりものに乗るときは順番を守るべきだ」の4項目で女子の平均評定点が高く,「13. 勉強することは小学生としてとうぜんのことである」,「19. プロレスごっこやテレビのアクションもののまねをするのは楽しい」の2項目で男子の方が高くなっている。

(2) 児童用達成・親和動機づけ尺度の結果

達成動機づけに関する17項目,親和動機づけに関する26項目についてなされた4件法による評定から,項目の意味が動機づけの強い方向から4,3,2,1の得点を与え,達成得点と親和得点を算出した。表2は,児童用達成・親和動機づけ尺度によって得られた達成得点と親和得点の平均,標準偏差及び達成得点と親和得点の相関係数を示したものである。

表2. 達成得点と親和得点の平均と標準偏差及び両得点の相関係数

群		達成得点	親和得点	達成-親和
N		X (s)	X (s)	r
全体	164	40.29 (7.44)	73.85 (8.71)	.045
男子	76	41.03 (6.63)	72.24 (8.67)	.097
女子	88	39.66 (8.03)	75.25 (8.51)	.037
性差の有無		t=1.17, p<.05	t=2.23, p<.05	

達成得点及び親和得点の両方に性差が認められ,達成得点については男子が,また,親和得点については女子の方が統計的に有意に高くなっている。

達成得点と親和得点の相関は,男子,女子,全体のすべてにおいて認められなかった。

(3) 達成得点,親和得点と生活意識との関係

達成得点と親和得点の両方に性差が認められたため,男女別々に,達成得点,親和得点と生活意識の関係について検討した。

a. 達成,親和得点と生活意識の相関的分析

達成得点及び親和得点と生活意識調査各項目との相関係数を男女別に算出した(表3)ところ,達成得点と統計的に有意な相関のあった項目は,男子で2,6,12,14,23,25の6項目,女子では2と7の2項目だけであった。そして,男女共に相関のあったのは「2. 学校から帰ると,なにもしないでねっころがっているほうが疲れなくてよい」であり,達成動機とは負の相関を示している。

この結果からみる限り,達成得点の高い男子は達成得点の低い子どもに比して「よい子

表3. 達成及び親和得点と生活意識各項目との r

項目	男子		女子	
	達成得点	親和得点	達成得点	親和得点
1	.080	.151	.150	.232*
2	-.318*	-.182	-.228*	-.205
3	-.036	.335*	-.055	.255*
4	.092	.225	-.047	.161
5	-.018	.261*	.146	-.072
6	-.310*	-.150	-.033	-.202
7	-.225	-.251*	-.273*	-.088
8	.164	.237*	.172	.184
9	-.182	.203	.077	.138
10	.066	.100	.124	.095
11	-.164	.031	-.135	-.231*
12	-.232*	-.178	-.208	-.159
13	-.145	.172	-.016	.165
14	.327*	.223	-.111	.215*
15	-.049	.286*	-.040	.052
16	-.035	.249*	.090	.276*
17	.030	.270*	.173	.060
18	.081	.423*	-.084	.264*
19	.048	.131	-.183	-.262*
20	.055	.202	.150	.189
21	-.218	-.274*	-.162	-.159
22	.182	.270*	.085	.156
23	.266*	.126	.149	.300*
24	.100	.400*	-.096	.111
25	-.240*	.087	.087	.138

志向]、「仲間との積極的な接触志向」であるといえる。また、達成得点の高い女子は、低い女子よりも「一人遊びよりも友達と一緒に遊ぶ」ことを好むといえる。

親和得点と統計的に有意な相関のあった生活意識調査の質問項目は男子で3, 5, 7, 8, 15, 16, 17, 18, 21, 22, 24の11項目, 女子で1, 3, 11, 14, 16, 18, 19, 23の8項目である。そして、男女共通に相関のあった項目は3, 16, 18の3項目である。

「3. 休日には家族と一緒にハイキングやスポーツを楽しみたい」, 「16. 学校から帰ると、ペットのせわをしたり、花だんに水をまいたりして過ごすことが多い」, 「18. ひまさえあれば、友だちと話し合ったり、遊んだりするのが好きだ」と、親和得点の高い子どもは男子であれ女子であれ家族との団らんを求め、家庭での自分の仕事をはたし、友達との相互交渉を楽しんでいるといえる。

男子だけでは、「5. 宿題や勉強をしてから遊ぶ節度」, 「7. 仲間との遊びを好む」, 「8. 家の手伝いをすすんでする」, 「15. スポ

ーツ活動を好む」, 「17. 本の読める環境を求める」, 「21. 外での遊び」, 「22. 音楽が好き」及び「24. 将来、世のためになる人物をめざす」傾向と親和得点との間に相関が見いだされている。

一方、女子では、「1. 絵を描くのが好き」, 「11., 14., 23. の社会規模への従順さ」と相関が見いだされている。男女共に、親和得点の高い子どもは、仲間との接触を求める傾向が強く、社会規模に対しても好意的であるのは当然としても、同時に、一人で楽しむことをも求めているといえるのは興味深い。

b. 高達成得点群と低達成得点群の生活意識の比較

男女別々に、表2の平均点と標準偏差を基にして、(X + 1σ)以上の達成得点の高い群(以下、達成H群)と(X - σ)以下の達成動機の低い群(以下、達成L群)に群分けし、両群の生活意識の比較を試みることにした。男子では達成H群、達成L群共に人数は

12名、女子では両群共に14名であった。表4は、達成H群、達成L群の生活意識に関する25項目の平均評定点及びH群とL群の平均点の統計的検定の結果を男女別々に示したものである。

男子で両群の間に有意な差異の認められた項目は3項目で、「2. 学校から帰ると、なにもしないでねっころがっているほうが疲れなくてよい」では $H < L$ 、「14. 暴走族のような……」及び「22. ピアノをひいたり笛をふいたり……」では $H > L$ となっている。また、女子のH群とL群の間では、「5. 宿題や勉強をしてからでないと、ともだちにさそわれても遊ばない」で $H > L$ の有意差が認められた。

表4. 達成得点と生活意識の関係

質問 項目 番号	男 子			女 子		
	達成 H 群 (n=12)	達成 L 群 (n=12)	H-Lの差 (tの値)	達成 H 群 (n=14)	達成 L 群 (n=14)	H-Lの差 (tの値)
1	4.08 (0.86)	3.67 (0.94)	2.28, $p < .05$	3.79 (0.86)	3.64 (0.90)	2.08, $p < .05$
2	1.17 (0.37)	2.17 (1.40)		1.64 (0.72)	2.57 (1.50)	
3	4.42 (0.76)	4.33 (0.94)		4.64 (0.81)	4.71 (0.45)	
4	3.00 (1.08)	2.50 (0.76)		2.79 (0.86)	2.64 (1.34)	
5	2.17 (1.21)	2.08 (1.04)		3.21 (1.21)	2.14 (1.41)	
6	1.08 (0.28)	1.67 (1.03)		1.21 (0.41)	1.29 (0.45)	
7	1.17 (0.55)	1.50 (0.87)		1.50 (1.12)	2.57 (1.59)	
8	3.67 (1.03)	3.00 (1.16)		3.50 (1.05)	3.14 (1.46)	
9	1.92 (0.95)	2.58 (1.32)		2.43 (1.18)	2.57 (1.45)	
10	2.67 (1.25)	2.33 (1.03)		3.36 (0.97)	3.29 (1.28)	
11	1.58 (1.19)	2.17 (1.34)		1.64 (1.17)	2.00 (1.41)	
12	2.00 (1.35)	2.92 (1.19)		1.86 (1.13)	2.79 (1.57)	
13	4.17 (1.21)	4.42 (0.76)		3.50 (1.05)	3.57 (1.59)	
14	5.00 (0.00)	3.42 (1.75)	2.99, $p < .05$	3.79 (1.57)	4.21 (1.52)	
15	4.33 (1.03)	4.42 (1.04)	4.21 (0.86)	4.36 (0.90)		
16	2.25 (1.30)	2.33 (1.37)	2.57 (1.29)	2.29 (1.49)		
17	3.50 (1.19)	3.17 (1.34)	4.07 (0.96)	3.14 (1.64)		
18	4.50 (1.12)	4.25 (0.92)	4.36 (0.90)	4.64 (0.61)		
19	3.00 (1.35)	2.58 (1.55)	2.21 (1.01)	2.79 (1.57)		
20	4.00 (1.16)	3.75 (1.23)	4.00 (0.93)	3.64 (1.29)		
21	2.00 (0.82)	2.75 (0.92)	2.21 (0.92)	2.57 (1.55)		
22	3.33 (1.37)	2.08 (1.44)	2.08, $p < .05$	4.14 (0.92)	4.36 (1.23)	
23	5.00 (0.00)	4.42 (1.12)	4.93 (0.26)	4.64 (0.61)		
24	3.92 (1.19)	3.42 (1.26)	3.57 (1.18)	3.79 (1.21)		
25	2.25 (0.92)	2.67 (1.49)	2.14 (0.99)	2.21 (1.37)		

c. 高親和得点群と低親和得点群の生活意識の比較

達成得点と同様に、平均と標準偏差を基に親和得点H群と親和得点L群にグループ分けした。男子では親和H群13名、L群14名、女子ではH群17名、L群14名であった。

男女共通にH群とL群の間に有意な差異が見いだされた項目は3、14の2項目である。また、男子だけが8、15、17、18、20、22、24の7項目、女子だけに有意な差であった項目が11、19、23の3項目である。

表5. 親和得点と生活意識の関係

質問 項目 番号	男 子			女 子		
	親和H群 (n=13)	親和L群 (n=14)	H-Lの差 (tの値)	親和H群 (n=17)	親和L群 (n=14)	H-Lの差 (tの値)
1	3.85 (1.10)	3.71 (0.88)		4.06 (0.94)	3.36 (0.97)	
2	1.15 (0.36)	1.71 (0.88)		1.65 (1.19)	2.29 (1.22)	
3	4.85 (0.53)	4.00 (0.93)	2.77, p<.05	4.88 (0.32)	4.00 (1.20)	2.59, p<.05
4	3.39 (1.15)	2.50 (1.12)		3.00 (1.57)	2.36 (0.89)	
5	2.69 (1.59)	1.71 (1.16)		2.12 (1.41)	2.79 (1.21)	
6	1.15 (0.36)	1.86 (1.16)		1.12 (0.32)	1.71 (1.16)	
7	1.15 (0.53)	1.86 (1.19)		1.65 (1.23)	2.07 (1.30)	
8	3.69 (1.07)	2.79 (1.08)	2.11, p<.05	3.76 (1.06)	3.43 (1.35)	
9	2.85 (1.35)	1.93 (1.03)		2.53 (1.29)	2.14 (0.83)	
10	2.31 (1.14)	2.00 (1.41)		2.76 (1.31)	2.50 (0.82)	
11	2.23 (1.48)	1.64 (1.17)		1.41 (0.49)	2.21 (1.26)	2.16, p<.05
12	2.23 (1.48)	2.86 (1.30)		1.47 (0.78)	2.14 (1.30)	
13	4.62 (0.74)	4.14 (1.06)		3.94 (1.30)	3.21 (1.32)	
14	5.00 (0.00)	4.07 (1.53)	2.10, p<.05	5.00 (0.00)	4.14 (1.30)	2.28, p<.05
15	4.85 (0.36)	3.79 (0.94)	3.67, p<.01	4.29 (1.18)	4.07 (1.22)	
16	2.31 (1.07)	1.71 (0.96)		2.35 (1.61)	1.71 (0.70)	
17	3.85 (1.10)	2.43 (0.98)	3.41, p<.01	3.41 (1.14)	3.07 (1.03)	
18	4.85 (0.36)	3.86 (1.30)	2.55, p<.05	4.71 (0.67)	4.21 (0.86)	
19	3.23 (1.58)	2.57 (1.05)		1.94 (1.11)	3.00 (1.36)	2.26, p<.05
20	4.39 (0.92)	3.36 (1.29)	2.28, p<.05	3.82 (1.04)	3.07 (1.10)	
21	1.69 (0.91)	2.43 (0.98)		2.12 (1.23)	2.64 (1.11)	
22	2.92 (1.49)	2.07 (1.28)	2.08, p<.05	4.18 (0.98)	3.43 (1.18)	
23	4.69 (0.61)	4.21 (0.94)		5.00 (0.00)	4.50 (0.73)	2.46, p<.05
24	4.31 (0.99)	2.50 (1.24)	4.01, p<.01	3.35 (0.84)	3.00 (1.31)	
25	2.46 (1.45)	2.21 (1.37)		2.24 (1.31)	1.71 (0.69)	

以上、達成得点及び親和得点と生活意識の関係について相関的分析及びH群とL群両群の比較という2つの側面から検討してみたが、特に、親和得点と生活意識の間にかんりの関係が存在することが明らかになった。

磯貝ら（1978, 1979, 1980）は、子どものライフ・スタイルについて研究を深めているが、子ども達が、日常の生活についてどの様に活動し、どのような事柄に興味や関心を持ち、意見をもっているのかを総合的に把握し、それらが子どもの意欲や目の輝きとどの様に関係しているのかを吟味していくことが重要であると考ええる。

参考文献

- 磯貝芳郎・上条芙美江・川浦康至・岡本敏雄 1978 子どものライフ・スタイル研究(1) 東京学芸大学紀要（第一部門） 29, 166—173
- 磯貝芳郎・川浦康至・岡本敏雄 1979 子どものライフ・スタイル研究(2) 東京学芸大学紀要（第一部門） 30, 75—80
- 磯貝芳郎・川浦康至・岡本敏雄 1980 子どものライフ・スタイル研究(3) 東京学芸大学紀要（第一部門） 31, 61—65
- 増田公男・山崎勝之・時田 学・島井哲志・鈴木隆男 1992 児童期のビデオゲーム遊びと肥満(2) 日本教育心理学会第34回大会発表論文集 27 p
- 文部省体育局 1991 平成2年版体力・運動能力調査報告書
- 村田義幸 1985 児童の生活意識に関する研究 九州心理学会第46回大会発表論文集 21 p
- 島井哲志・増田公男・鈴木隆男・山崎勝之・時田 学 1992 児童期のビデオゲーム遊びと肥満(1) 日本教育心理学会第34回大会発表論文集 23 p
- 下山 剛 1981 達成動機づけの教育心理学 金子書房
- 総務庁青少年対策本部 1991 平成2年版青少年白書
- 総務庁青少年対策本部 1992 平成3年版青少年白書